

「『国富論』における価値論 の位置」に関する諸見解

— 海外におけるアダム・スミスの
価値論についての諸研究から —

中 川 栄 治

序

いうまでもなく、アダム・スミスの価値論については、これまでに、日本国内においてもまた海外においても、さまざまな角度から数多くの研究がなされてきた。そこで、わたくしは、それらの諸研究のうちでわたくしが手にすることのできた諸文献を手がかりにして、本誌において、以下数回にわたって、スミスの価値論についての諸研究のサーヴェイを試みたいと思う。本稿は、その第一回目のものであり、アダム・スミスの価値論に言及している主に今世紀に入ってから海外において発表された諸研究から、『国富論』においてスミスの価値論がどのような位置を占め、どのような役割担わされているかという問題にたいする諸見解を、わたくしなりに整理することを目的として、作成されたものである。

I

A.C. ホワイターカーは、1904年の彼の著書において、スミスはもともと現代の経済理論が到達することを望むような正確さをもって、価値の法則を記述することを実際に計画したようには思えない、つまり、スミスの価値論は、価値という事象についての骨のおれる分析の試みというよりも、

むしろ、富についての重商主義的見解にたいする抗議の言葉のなかでたまたま展開されたものである、という見解を示した。¹⁾

他方、E. キャンンは、その初版が1929年に出版された彼の著書において、『国富論』における価値についてのスミスの議論を、生産理論からの単なる逸脱として把握している。つまり、キャンンによれば、スミスは『国富論』の「序論および本書の構想」の最初の部分において体系的な生産理論への大きな希望を抱かせているにもかかわらず、彼が実際に達成したことは彼が約束したことよりもはるかにわずかなことであった、スミスは、聡明ではあるが短い三つの章つまり分業論の後に、生産理論についての問題から逸脱して、貨幣の起源と使用についての議論を経て、『グラスゴー大学講義』のなかですでに展開されていた価格理論に逆戻りしてしまった、²⁾というのである。

以上のような見解と対照的なものとして、我々は、まず、E. ロールの見解をとりあげることができる。ロールは、その初版が1938年に出版された彼の著書において、さきのホワイトカーと同じように、スミスが富についての重商主義的見解を克服しようとしたことを認め、さらに、それよりすすんで、重商主義的・重農主義的桎梏から経済思想を解き放したという点で経済思想の大きな進歩をもたらしたとして、スミスを高く評価する。つまり、スミスが、富の源泉を交換の領域に求める重商主義さらに生産の領域ではあるが具体的な生産形態の一つである農業にのみ富の源泉を求める重農主義を克服して、富の源泉を労働一般に求めた、ということが強調されるのである。しかしながら、ロールは、価値論で取り扱われる問題を「彼の(スミスの—引用者)経済的研究の中心課題」³⁾としている。また、スミスの価値論が分業論→貨幣についての短い議論のあとに位置しているこ

1) A. C. Whitaker, *History and Criticism of the Labor Theory of Value*, (1904) reprinted, New York, 1968, p. 16.

2) E. Cannan, *A Review of Economic Theory*, (1st ed., 1929) 2nd ed., London and Edinburgh, 1964, pp. 53-54.

3) E. Rolle, *A History of Economic Thought*, (1st ed., 1938, 2nd ed., 1945) Kinokuniya Asian Edition, 1975, p. 156.

については、ロールによれば、それは確かに回り路ではあるが、スミスはなお有用な物的対象という意味で富を語りながらも、富を労働一般から導くことによって、富の技術的な形態よりもむしろその社会的形態へと向った、スミスが彼の分析を分業から始めたのは、彼が、特殊な諸商品（諸使用価値）を創り出す特殊な・具体的形態の労働を、抽象的な富（交換価値）の源泉となる社会的範疇としての労働に転化させる原理を発見することを欲したからだ、とされる。したがって、ロールによれば、うえのような経路を経て価値論が展開されることとなったという問題は、スミスが重商主義的なあるいは重農主義的な、富の具体的体現物にたいする関心を拒否することから出発し、そして社会的範疇としての富一般の検討に進んだという事実のなかにもともと具わっていた、ということになる。⁴⁾したがってまた、このような見解からすれば、『国富論』におけるスミスの価値論は、重商主義批判と深い関連を持つものではあるが、それは、重商主義への抗議の言葉のなかでたまたま示されたものというよりも、それなりの論理構造のなかで述べられているものであり、また、生産理論からの単なる逸脱としてかたづけられるものでもない、ということになるであろう。⁵⁾

4) E. Roll, *ibid.*, pp. 154 - 156. 隅谷三喜男訳『経済学説史』(上,下),(第2版の訳),有斐閣,1970年,(上)196 - 199ページ。

5) なお、『国富論』における分業論と価値論との関係あるいは分業論→(貨幣についての議論)→価値論といった展開については、たとえば、R. L. Meeckの、『国富論』における価値についてのスミスの議論は社会のなかでの分業についての彼の議論から始まる、とする説明も参照せよ。(R. L. Meeck, *Studies in the Labour Theory of Value*, (1st ed., 1956) 2nd ed., London, 1973, pp. 60ff. 水田洋・宮本義男訳『労働価値論史研究』,(初版の訳),日本評論社,1957年,66ページ以下)。

また、A. スキナーは、つぎのように説明する。スキナーによれば、スミスは『国富論』において基礎的な仮説(利己心)、モデルの主要な諸要素(諸部門、諸階級、等)および安全の条件(正義)を前提して、彼の歴史理論の「商業」段階に相当する経済類型がいかに作用ないし機能するかということを説明しようとするのであるが、そのさいスミスは『国富論』をつうじて経済現象の相互依存性を特に強調する。そして、この「相互依存性」という主題は二つの異なった方法で

(注5は次ページへつづく)

一方、R.L.ミークは、その初版が1956年に出版された彼の著書において、「市民社会」の研究という視点から、スミスにおける価値論を位置づける。ミークによれば、スミスの第一の関心、また、彼をとりかこむ思想家群の第一の関心は、「市民社会」の性質と発展ということにあった。そして、政治経済学は、スミスにとって、マルクスのいわゆる「解剖」がくわだてられるべき主な領域であった。市民社会の研究は、本質的に新しいものであったし、また、スミスは、哲学のおよび経済学的な思考を真に再編成しなければ市民社会の研究を効果的に行なえないということに気づいていたように思える。新しい仕事は新しい道具を必要とした。そして、この新し

(注5)のつづき)

展開される。第一に、スミスは、諸個人の(経済的)相互依存性を考察し、そうしてこれを媒介にして交換価値、価格、さらに資源配分の諸問題を順次導入する。第二に、スミスは、重農主義者たちを想起させるようなやり方で、しかし経済成長と資本蓄積を強調するような形で、諸グループおよび諸部門の相互依存性を示す。なお、分配理論がその議論の二つの部分のあいだの形式上の連結環となっており、さらに、分業という概念も、両者に共通である。ところで、スミスのモデルはいくつかの異なった諸要素を有してはいるがスミスが最大の力点を置いた主要点は分業である。分業には、仕事の類型にしたがった専門化(社会的分業)と各々の仕事の内部における専門化(工程の分割、作業場内分業)が含まれている。スミスにとってこの分業論が重要であったのは、二つの主要な理由による。第一に、(工程の)分業が近代の比較的高い労働生産性を説明するのに役立つということ。第二に、スミスがさらに注目したことであるが、(仕事の)専門化が行なわれる結果、必然的に、高度の相互依存性が生じることになる、ということである。そして、この高度の相互依存性についての議論に直接的に関連してスミスは交換の必然性ということを示すこととなり、この考察をとおして、スミスは価値の問題に到達した、というのである。(A. Skinner, 'Introduction' to *Wealth of Nations*, Penguin Books, 1970, pp. 43-47. 川島信義・小柳公洋・關源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』, 未来社, 1977年, 91-100ページ。)

また、後述のO.H.テラーの見解、さらに、H.M.ロバートソンとW.L.テラーの、価値論も含めた全体としての『国富論』における論理の展開についての要約的な記述も参照せよ。(H. M. Robertson, W. L. Taylor, 'Adam Smith's Approach to the Theory of Value', *Economic Journal*, vol. LXVII, June 1957, reprinted in J. J. Spengler, W. R. Allen eds., *Essays in Economic Thought*, Chicago, 1960, pp. 298-299)

い道具のうちで、もっとも重要なもののひとつで、そのとき発展しつつあった新しい社会経済的諸関係の分析を助けるために、きわめて意識的に展開されたものが、『国富論』第一編に提示された価値論であった、というのである。⁶⁾

また、M. ドップは、1973年の著書において、古典派政治経済学が明らかにしようとした主たる関心事は、自己制御的な経済秩序についての「自然法則」ということであつたとし、そして、彼は、スミスはこの問題を、供給と需要にたいして競争が及ぼす作用をつうじてある一定の「自然価値」(“natural values”)を成立させる市場の観点から眺めたのであり、そして、そのような「自然価値」は、すべての人為的な価格がそれと対比され、表現されるところの比較のターム、あるいは基準 (norm) となつていて、⁷⁾ ということを指摘している。したがって、この「自然価値」を取り扱う価値論は、スミスにおいては、古典派政治経済学の中心的関心事たる自己制御的な経済秩序についての「自然法則」を考察するうえでの、基礎となるものであるということになるであろう。⁸⁾

6) R. L. Meek, *ibid.*, p. 45. 邦訳, 46ページ。

7) M. Dobb, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith — Ideology and Economic Theory*, Cambridge, 1973, p. 43. 岸本重陳訳『価値と分配の理論』, 新評論, 1976年, 59ページ。

8) なお、価値論そのものの本来の課題、本質等という問題については、キャンナン、ドップ、ミークのつぎのような諸見解がある。

キャンナンは、価値理論は一般的なタームでつぎのことを説明すべきであるとする。すなわち、諸商品や諸サービスは、何故に、それらが交換されている比率で交換されるのか、ということ、そして、何故に、時間の経過とともに、それらの比率が変化するのか、ということである。(E. Cannan, *ibid.*, p. 170.)

他方、ドップは、(政治)経済学を構成する諸命題にたいする価値論の関連に関して、「政治経済学の場合、『国富論』の刊行以前には、経済問題の研究は記述的・分類的な段階、つまり初歩的な一般化と特殊研究の段階、をこえていなかったということはおそらく真実であろう。アダム・スミスの労作とリカードによるその一層厳格な体系化によってはじめて政治経済学は統一的な量的原理を創りだした。そしてこの原理によって経済システムの一般的均衡という言葉を使って公準を設定すること——システムのなかの主な要素相互のあいだに行なわれる一

(注8は次ページへつづく)

O. H. テーラーも、1960年の著書において、スミスにおける価値・価格

(注8)のつづき)

般的関係を決定論的に叙述すること——ができるようになったのである。政治経済学においてはこの統一原理、もしくは一般的叙述の体系、は量的形態をとり、価値論によって構成された。」と述べる。そして、彼は、このようなものとしての価値論が十分にその機能を果たすためには、形式上の整合性だけでなく、それにもまして「現実性」を持たなければならないことを指摘し、さらに、それが一般性を保持するためには不変なものと仮定しうる条件の数が少なくなってくることを指摘することをつづいて、価値論の本質的な必要条件として、つぎの2点をあげる。そのうちのひとつについて、つぎのように述べる。「それが商品価値の問題だけでなく、分配の問題をも解決し(すなわち、労働力、資本、および土地の価格を決定し)なければならない、ということである。そしてその理由は、単に後者が政治経済学の関与する実際的研究の本質的な、実に主要な、部分であるということだけではなく、一方は他方なしには決定されえないがためでもある。換言すれば、分配も商品交換も、『孤立した体系』として取り扱うことは許されないのである。このことをさらに一般的に表現すると、価値を単に何らかの特殊な価値によって表現するにすぎない価値原理は、妥当なものではなく、決定因たる常数はそれ自体は価値でないところのある量との関係を表現しなければならないということになる。」他方、第二の必要条件について、つぎのように述べる。「経済理論が量的な形態をとらなければならないということは、その論題の性質および叙述の型からみて、明らかなように思われる。もしそうだとすれば、当然、決定をする関係、つまり方程式体系に現わされる体系は、現実世界の量的実体によって表現することの可能なものでなければならない。これらの関係は、具象的に把握し認識することの可能な、現実的な次元に、翻訳できるものでなければならない。……これは必ずしも、価値論が商品の交換価値を何か単一な次元または単一な現実的実体に関係させる必要があるというのではない。もっとも実際には、結局こうしなければならなくなるかもしれないが、しかし、多少とも完全な量的叙述を行なうためには、価格-変数が連係させられるところのにかかる支配的諸次元または諸実体が、自らをある共通な名辭に還元することができるように相互に関係させられていなければならない。」(M. Dobb, *Political Economy and Capitalism, Some Essays in Economic Tradition*, (1st ed., 1937, 2nd revised ed., 1940) reprinted, London, 1960, pp. 3-12. 岡稔訳『政治経済学と資本主義』, (1950年のリプリント版の訳), 岩波書店, 1966年, 3-11ページ)

ミークも、価値原理の本質は、その性格上量的であるべきことを強調する。彼によれば、価値原理は、関連はするが別個な二つの問題を説明しうるものでなけ

(注8は次ページへつづく)

論の重要性を指摘する。テラーによれば、スミスの第一の主要関心は、総国民所得あるいは全体としての産出高と、その成長の諸条件（つまり、高水準の一人当たり生産高と富ということに導くとともにまたそれらを上昇させるであろうところの、国民経済の一般的に効率的な機能と国民経済の発展の「諸原因」もしくは諸条件）とについての、広範な研究ということにあった。このような関心から、スミスは分業に注目するのであるが、彼がそこに見出したものは、分業の進展が生産性向上の主要原因であるということだけでなく、分業の進展と不可分に結びついた、諸々の専門化した生産者グループの生産物を交換するための、市場システムの発達ということでもあった。このことは、スミスの研究に、最も生産的で最も必要とされる用途への労働・土地・資本の配分の、「自然的な」規定者としての市場・価格システムの「自然的な」機能についての、さらに、それが最も良好に機能するための諸条件についての、本質的な分析を含ませることとなった。そして、テラーによれば、スミスの研究のこの部分は、彼の経済的自由主義と経済学とが最も十分に統合されている部分とされる。つまり、すべての人々が、平等な自由をもって、あらゆる機会に接近したりそれらの機会のあいだの選択をなすということ、さらに、すべての人々のあいだの自由な競争ということ、スミスはこれらのことを道徳的命令と感じていたのであるが、これらのことはまた、スミスの経済分析においては、市場・価格システムの最良の経済的機能のための主要な条件でもあった。スミスは、この条件が、資源のすべての使用法のパターンあるいはバランス、しかも、国民生産物と国民の欲望充足とを極大化させるよう適切に調整された生産物供給をもたらすところの資源の使用法のパターンあるいはバランスを、維持すると考えた。以上のことから、テラーは、スミスの

(注8)のつづき)

ればならないとされる。その一つは、一商品が「他の諸財貨を買う力」を持つのは何故かということ、つまり、価値の源泉を説明しうるものでなければならない、もう一つは、それが実際に持っているまさにそれだけのこの力を、何故もっているのかということの説明しうるものでなければならない、ということである。

(L. R. Meek, *ibid.*, pp. 62- 63, 邦訳, 69ページ。)

価値論を、諸国民および世界の経済システムの最善可能な発達と機能とについての彼の全体的なより広範囲な理論の、小さくはあるが欠くことのできない中心的な部分を構成している、とするのである。⁹⁾

したがって、テーラーは、自由な市場・価格システムをつうじての資源配分という観点から、スミスの価値・価格論の重要性を指摘している、といえるであろう。

ところで、このテーラーの見解は、いうまでもなく、いわゆる近代経済学の視点から、『国富論』における価値論の位置を論じたものといえるが、近代経済学の視点から『国富論』の経済理論体系における価値論をとらえようとした諸見解のうちのいくつかのものから言える一つの特徴は、スミスの経済学の本質を何に求めるかということをめぐる、スミスの価値論のとらえられ方に、二つの傾向がある、ということである。その一つは、スミスの経済学の中心的な問題は稀少資源を代替的な諸用途に効率的に配分することにあるとする立場から、スミスの価値論をみるものであり、他方は、スミスの経済学の中心的な問題を成長の問題にかかわるものとする視点から、スミスの価値論をみるものである。次節では、この問題を含めて、『国富論』の経済理論体系における価値論の位置、役割に関する諸見解をみることにする。

II

(a)

L. ロビンズは、1932年にその初版が出た彼の著書において、『国富論』は諸国民の富の諸原因を取り扱うということを明言し、事実、応用経済学のような歴史にあってもきわめて重要な、豊かさの諸条件の一般的問題についての多くの所見を述べたけれども、それでもなお理論経済学の観点からすれば、『国富論』の中心的業績は、どのような様式で分業が相対価

9) O. H. Taylor, *A History of Economic Thought—Social Ideas and Economic Theories from Quesnay to Keynes—*, New York, Toronto, London, 1960, p. 102.

格機構によって均衡に保たれる傾向があるのかということを表示したことであった、古典派は別名のもとにその目的を隠そうとしたけれども、価値と分配の理論こそ真に古典派の分析の核心であった、とする。ロビンスの¹⁰⁾

10) L. Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, (1st ed., 1932, 2nd revised and extended ed., 1935), reprinted, London, 1962, pp. 68-69. 中山伊知郎監修, 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』(第2版の訳), 東洋経済新報社, 1957年, 105-106ページ。

なお, S. ホランダールが指摘しているように, 『国富論』の主要目標についてのロビンスによる最近の叙述には強調点の変化がある。つまり, ロビンスは, 彼の『経済発展の学説』において, 「経済発展を一般分析のための主題として重視することにたいする最大の荣誉は, 疑いもなく, アダム・スミスのものである。『国富論』は, 世界の著作のうちの, きわめて実りの豊かな研究の一つであり, それは, そのようなものとして, 政治経済学としてはいうまでもなく, たとえば社会哲学とか, 経済史といった多面性をもつ。しかも政治経済学としても, その分析の対象領域は広く, 分業をもたらす交換経済のもっとも本質的な構造連関の展開から, 國家の経済的諸機能や課税原則にまで説き及ぶ。しかしその表題そのものが示唆しているように, その分析の焦点は, 発展 — すなわち, 何が諸国民の富の増減をもたらすかということ — に置かれている。」と述べている。(L. Robbins, *The Theory of Economic Development in the History of Economic Thought*, London, 1968, p.9. 井手口一夫・伊藤正則監訳『経済発展の学説』, 東洋経済新報社, 1971年, 10ページ。S. Hollander, *The Economics of Adam Smith*, Toronto and Buffalo, 1973, p.20, n. 53. 小林昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斎藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』, 東洋経済新報社, 1976年, 30ページ(註53)。

他方, F.H. ナイトも, スミスが価格競争のもとでの生産の組織化過程についての明確な見解を自然価格との関連で展開しているとして, スミスの議論の業績を認めている。つまり, ナイトは, スミスが明示的に土地, 労働, 資本という三つの生産要素を経済的再調節過程において同様な地位, 役割を果たすものとして位置づけ, またそれら三つの生産要素のすべてを「苦痛」としてではなく生産能力として取り扱い, そして, 調節過程とは, すべての競争的な分野における三つの生産要素の各々の報酬が均等化されるまでの, 報酬の少ない用途から多い用途への個々の生産要素の移動の過程であるということ, を, かなり明らかにした, とするのである。(F.H. Knight, 'The Ricardian Theory of Production and Distribution', *Canadian Journal of Economics and Political Science*,

(注10は次ページへつづく)

このような見解は、S. ホランダ―によれば、つぎにみる M. ボーレイの『国富論』の「一般均衡的」側面を強調する見解とともに、スミスの経済学の本質そのものはまさしく稀少資源の最適配分を確保するのに生産要素の相対価格が果たす役割を叙述することにあるとする見方の、代表的な見解とされるのであるが、¹¹⁾他方でまたこのような見解によれば、価値論はそのような意味でスミスの経済学の中核的な地位を占めるとともに、その価値論の役割、意義は、資源配分、一般均衡といった側面から見い出されることとなる、といえるであろう。

なお、M. ボーレイの見解とは、「アダム・スミスが富についての消費者の立場からの考え方——『生活の必需品と便益品』——を『見えざる手』の理論とともに採択したことが、ついに、経済学的思考を、生産を消費者需要に結びつけるメカニズムの発見へと向けたのであった。これらのことが主題であったのであり、そしてそれにつづく諸理論はその主題の内容を発展

(注 10) のつづき)

vol. 1, Feb., 1935, pp. 173-174.)

また、J. A. シュムペーターは、スミスが示した価値論は、労働価値説ではなく、『国富論』第 1 編第 6 章からも明らかのように、商品価格を賃金、利潤、地代に分けられる生産費によって説明しようとする生産費説であり、この生産費説は価値の説明としてははなはだ不満足なものであるけれども、他面では、それは、均衡価格理論や分配論の双方に至る通路として役に立つ、とする。さらに、彼は、『国富論』第 1 編第 7 章で展開されるスミスの議論を初歩的な均衡理論としてとらえ、スミスが作り出した経済理論のなかの最上の部分とし、それはセイ、ワルラスの一般均衡理論への路を開いたもの、としている。(J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, 1954, pp. 188-189, 307-311.

東畑精一訳『経済分析の歴史』(全 7 巻)、岩波書店、1955-1962 年、第 1 巻、392-394 ページ、第 2 巻、644-652 ページ、また、*Ibid.*, pp. 567-568. 邦訳、第 3 巻、1192-1194 ページも参照せよ。)

11) S. Hollander, *ibid.*, pp. 19-20. 邦訳、17-18 ページ。

12) M. Bowley, *Nassau Senior and Classical Economics*, (London, 1937) reprinted, New York, 1967, pp. 67-68.

させたもの (variation) であったのである。¹²⁾ というものである。そして、ボーレイによれば、スミス自身の価値および分配の理論は、一部分、いまみた中心的な考え方つまり生産を消費者需要に結びつけるメカニズムの説明ということに、また一部分はなんらかの種類の指数によって富の進歩を測定する方法を発展させることに、向けられた諸示唆の合成物にすぎないとされるのであった。¹³⁾

他方、V. W. ブラインドは、1988年の論文において、うえにみたキャンンの見解、つまり、スミスの価値論を彼の生産理論からの逸脱とする見解を批判して、スミスの価値論を、生産理論からの逸脱としてではなく、生産理論のつづきとして、とらえようとする。彼は、『国富論』の第1編第5章と、第11章の大部分は、本質的には生産理論のつづきであり、それらは「労働の生産諸力における改善」とかかわり合うものであるとし、さらに、第7章「諸商品の自然価格と市場価格について」も、生産理論の本質的部分をなす、とするのである。その理由について彼はつぎのように述べる。たしかに、価値問題にたいする論究計画についてのスミスの言葉 — 「諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、わたしはつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。¹⁴⁾」 — をその言葉どおりに受けとれば、第5章は交換価値についての議論の一部分ということになる、だが、第11章の諸部分とともに第5章を研究すれば、それが全く別の事柄を取り扱っていることが明らかになる。そこには二つの目的がある。一つは、貨幣のヴェールを、実質的なプロセスにまで、つまり、人々は働きそして他人の所産を支配しているという実質的なプロセスにまで引きおろすこと。もう一つは、財貨の生産の難易の尺度、生産効率の変化の尺度、「実質費用」の変化の尺度を、見出すことである。他方、第7章については、そこでの(また『国富論』をつうじての)主要な関心は、生産の適正な方向ということに関するもので

13) M. Bowley, *ibid.*, p. 68.

14) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York, 1937, p. 28. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年, (I) 50ページ。

あり、それ故、この章は生産理論の本質的な部分をなすものであるとされる。つまり、スミスの関心は、諸価格がなぜそうであるのかということよりも、むしろ、最善の資源配分はどのようなものなかにあるのか、ということにあるというのである。そして、この価値論は、レッセ・フェール弁護論の本質的な部分をなすのであり、このことは第7章とともに第4編が読まれれば明らかである、とされる。¹⁵⁾

なお、ブライドンは、『国富論』第1編第7章に展開される「自然価格および市場価格」の理論を、現代的な意味でのスミスの「価値論」とし、非常に現代的な性格を持った、短期の「市場」価格および長期の、正常価格すなわち「自然」価格の理論を含んでいるとしている。それに関連して、この議論のなかで使用されている生産費は選択的な機会というタームで解釈されるということを描し、また、スミスが示しているような生産費説は、供給が変化しても費用が一定と仮定できるかぎりでの、競争という条件のもとでの「特殊均衡」についての説明としては満足的なものであるとともに、この理論は、各々の生産要素の様々な選択的諸用途における各々の生産要素の稼得の均等という条件に注意を向けることによって、「一般均衡」への導入を提供している、ということを描している。¹⁶⁾

(b)

『国富論』におけるスミスの価値論をどちらかといえば主に価格メカニズムをつうじての所与の生産要素の効率的配分、一般均衡という観点から位置づけるロビンズ、そしてボーレイの見解は、『国富論』における、稀少資源の効率的配分を確定するうえでの生産物や生産要素の相対価格の機能の論証という側面を強調する立場と結び付きを持っているといえるわけであるが、このような立場にたいして、H. ミントは、1948年にその原版が出た彼の著書において、スミスの基本的な関心は、代替可能な諸用途間への稀少資源

15) V. W. Bladen, 'Adam Smith on Value', in *Essays in Political Economy in Honour of E. J. Urwick*, edited by H. A. Innis, Toronto, 1938, pp. 28 - 29.

16) V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 40 - 42.

ただし、ブライドンは、最近の著書において、「この書物(『国富論』—引用(注16は次ページへつづく))

の効率的配分というよりも、むしろ、物的な富の増大にあったという見解¹⁷⁾を示している。彼は、うえにみたボーレイの見解を一例としてとりあげ、そのような見解を批判して、スミスの中心的な問題は、様々な商品に対する消費者の市場での需要によって表現されるものとしての、消費者の欲望の満足を極大化するというのであったという解釈はゆきすぎであろう、とする。この点に関するミントの主張の要旨はつぎのようなものである。もちろんスミスは、すべての生産の最終的な目的は消費であるということ、また、究極的には富は消費者の満足の量にあるということに、同意するであろう。しかしスミスは、正常な状態のもとではすなわち供給に過不足が存在しない場合には、商品からの消費者の満足は、その商品の内在的な物的性質によって決定されるものとしてのその商品の「使用価値」に依存すると見なされてもよい、と暗黙裡に仮定しているように思える。そしてこのことは、結局、満足の量は、おおよそ、物的生産物の量に比例するというを仮定することになる。こうしたうえで、スミスは、国民の富へのより実質的な付加は、所与の生産物量のもとの消費者選好への調節をなすことによるよりも、むしろ、物的産出高の増大によってなされうるであろうという仮定にもとづいて、彼の分析の大部分を展開することへと進んだ。かくして配分問題は補足的な論題となり、また、スミスがいかに需要アプローチに傾いていたとしても、彼は、彼の当初の見地つまり経済問題を物的富の生産における自然にたいする人間の闘争と考えるといった見地によって示唆される物的分析レベルにとどまることができた。つまり、経済問題を物的富の生産における自然にたいする人間の闘争と考えるこの見地は、スミスの注意の焦点を、

(注16)のつづき)

者)の主題は富であって均衡ではない。つまり生産性の成長についての議論が市場における交換の作用についての議論に優先するのである」(V. W. Bladen, *From Adam Smith to Maynard Keynes; The Heritage of Political Economy*, Toronto and Buffalo, 1974, p. 13.)と述べているように、彼は、さきにみたM. ボーレイらとは異なって、『国富論』における価値論を主にこの観点から位置づけている、といえる。

17) ホランダールは、このような見解をとる代表的な経済学者として、ミントの他に、J. B. ヒックス (J. R. Hicks, *Capital and Growth*, Oxford, 1965.) をあげている。(S. Hollander, *ibid.*, pp. 17-19. 邦訳, 15-17ページ。)

消費者満足を極大化させるためにさまざまな産業の間に所与の資源を配分するといった問題から、労働の物的生産性および経済活動の総量を増大させるという問題へと、体系的にシフトさせた。分析の主観的レベルは、消費者の満足の量はおおむね物的生産物の量に比例するという仮定によって、背景へと押しやられてしまった。所与の資源量という仮定は、分業の進展および総労働供給の増大による国民配分増大の可能性にたいするスミスの関心によって、削り去られてしまったのである。¹⁸⁾

スミスの経済学についてのこのようなミントの認識と同様な立場から、価値についてのスミスの議論をみるのが、A. K. ダス・ギュプタである。

ダス・ギュプタは、1960年の彼の論文において、つぎのことを示そうとしている。その一つは、価値に関する議論におけるスミスの主要な関心は、価値尺度(a measure of value)を見い出すことにあったのであって、一般的な価値理論を提供するということではなかった、生産費アプローチでさえ、ある限られた意味では、一つの理論とみなされるけれども、一つの社会的範疇としての価値を説明するよう意図されてはいなかった、ということ。もう一つは、価値論は、スミスの経済分析体系にとっては補足的なものにすぎない、つまり、価値論は、リカードの体系や新古典派の体系の核を構成しているようには、スミスの体系の核を構成してはいない、ということである。¹⁹⁾

18) H. Myint, *Theories of Welfare Economics*, (London, 1948) reprinted, New York, 1965, pp. 1-6. なお、ミントは、つぎのような但書を示している。「我々が以上で述べてきたことは、もちろん、古典派経済学者たちのだれもが『配分』問題を決して取り扱わなかったということを用いているのではない。これはもう一方の極端に走るものであろう。『困富論』を注意深く読めば、つぎのことがわかるであろう。すなわち、この問題についてのスミスの分析は全体としてみれば二つの奇数の章、第1編第7章と第9章に限られているということ、しかし、我々が彼の『見えざる手』の作用に関する形而上学的な楽観主義に同意しようがしまいが、この狭い範囲のなかでスミスは、競争的な市場の均衡プロセスがさまざまな産業のあいだでの最適資源配分に導くであろうということを示すことに成功している、ということである。」(H. Myint, *ibid.*, p. 12.)

19) A. K. Das Gupta, 'Adam Smith on Value', *The Indian Economic Review*, The Delhi School of Economics, University of Delhi, vol. 5, no. 2, 1960, p. 105.

ダス・ギュプタは、つぎのように述べている。「価値分析のコンテキストにおけるスミスの主要な関心は、商品の価値の尺度を発見すること、またそれから、諸国民の富の尺度を発見することであった、ということには、事実、ほとんど疑いはありえない。価値についての他の諸概念は、付随的なものにすぎないのであって、それらの諸概念の意義は、尺度という主要問題との関連で見られるべきである。²⁰⁾」。

また、ダス・ギュプタは、生産費についてつぎのような見解を示す。つまり、多くの人々は、この生産費に関するスミスの議論を、スミスが与えた価値論と考えようとしてきた。また、たしかに、F. フォン・ヴィーザー²¹⁾からシュムペーター²²⁾に到るスミスの諸解釈者たちの多くの人々がそうしたように、「生産費」に独立的な地位を与え、そしてそれを、スミスが「自然価格」と呼ぶものと結びつけてもよいかもしれない。だが、生産費は、ある限られたコンテキストにおいてのみ、つまり、賃金、地代、利潤という費用の諸構成要素が独立の与件と見なされうるといったコンテキストにおいてのみ、価値を説明するものと考えられうだけである。ところで、スミス自身はこのような限定的な範囲をこえてその「理論」の適用を拡大しようと思っていなかったのではないかと思える、スミスがここで言及しているのは明らかに、まさしく一人の個別的な生産者あるいは一つの個別的な商品なのである。また、スミスが商品および要素市場をつうじて作用する費用—価格均衡という現象に気づいていたということを確認しても、その理論を、しばしばなされるように、一般均衡を包含するものとして解釈することは、幾分根拠のないことであろう。「生産費」を、価値現象の説明そのもの — およそ価値「理論」とはそのようなものであるべき

20) A. K. Das Gupta, *ibid.*, p. 110.

21) ダス・ギュプタが示しているように、ヴィーザーは、スミスの価値分析のこの部分を「経験的理論」と名づけ、労働のタームでなされる「哲学的理論」と区別している。(F. von Wieser, *Natural Value*, (1889), edited by W. Smart, translated by C. A. Malloch, 1893, reprinted., New York, 1956, pp. xxvii - xxviii.)

22) 本稿脚注 10)を見よ。

23) ダス・ギュプタは、このような解釈の例として、本稿脚注(10)でみたようなシュムペーターの解釈をあげている。(A. K. Das Gupta, *ibid.*, p. 111, n. 16.)

である — としてよりも、むしろ、労働尺度に到達するための媒介物として、スミスの体系において役立っていると解釈することが可能である²⁴⁾。『国富論』のなかの全価値分析における動機は、尺度の発見ということな

24) 以下のように要約されるダス・ギュプタの議論を参照せよ。つまり、スミスは「使用価値」と「交換価値」という二つの価値概念があることを認識していた、彼はそのうちで「交換価値」を取り扱った、そして彼においてはこの「交換価値」は測定することが可能な数量であった。彼は、商品の交換価値を、それを所有することがもたらす他財にたいする購買力であると定義し、そして、商品の(交換)価値の経時的な変動^{スタンダード}という問題等を解決して交換価値を測定するための、それ自体不変な共通の標準を「支配労働尺度」に求め、商品の交換価値は、交換においてその商品が支配する労働量という尺度によって測定されるとした。このような認識のもとに、スミスは「名目価格」、「貨幣価格」からこの尺度を導出する問題、「貨幣価格」をスミスが価値と同義語として使用する「真実価格」に転換する問題を取り扱う、そしてこの問題にたいする解答がスミスの価値分析の最も重要な局面を構成するのである。土地の占有と資本の蓄積に先立つ初期未開の社会の状態という特殊なケースでは、労働が生産の唯一の稀少な要素である。このような単純なケースでは、生産されるもののすべてが賃金として労働者のもとへと行き、市場においてその商品によって支配される労働はその商品に体现された労働に等しい。いまもし、 w でその商品の生産に使用された労働にたいして支払われる賃金総額を表わし、 \bar{w} で労働一単位当りの賃金を表わすとすれば、賃金が商品の販売から得られる唯一の所得形態であるかぎり、 $\frac{w}{\bar{w}}$ は、支配される労働量でもありまたその商品に体现された労働量でもある。いずれにせよ、交換価値の尺度としての支配労働量はこのようにして導き出されることとなる。しかしながら、スミスのいう進歩した社会、つまり、資本が蓄積され土地が占有され、したがって、賃金のほかに他の要因が生産費に入ってくる進歩した社会では、先に見たようには直接的に価値を労働に還元することはできない。一商品に体现される労働は交換において支配される労働よりも少なくなる。費用に計算されるべき他の要因は資本の使用にたいして支払われる利潤と土地の使用にたいして支払われる地代である。いまや、貨幣価格は、賃金、利潤、地代からなる生産費に等しくなる傾向がある。このような複雑なケースでも、労働尺度は一商品の生産過程に支出される賃金、地代、利潤の総計から導き出される。転換の原理は単純なケースにおけるのと同一である。いま、 w で賃金を、 r で地代を、 p で利潤を、 \bar{w} で労働一単位当りの賃金を表わすとすれば、一商品によって支配される労働という尺度は、 $\frac{(w+r+p)}{\bar{w}}$

(注24は次ページへつづく)

のである。²⁵⁾

では、『国富論』における価値分析の意義はどこに存するのか、また、どのように、「価値」は『国富論』の主要構造に関連づけられるべきか、という問題について、ダス・ギュプタは、以下のように述べる。つまり、いわゆる新古典派体系にあっては価値論が経済分析の核を形成するのであり、そしてこの学派に属する経済学者にとっては、経済学の問題は、本質的には、稀少資源の配分の問題、すなわち、稀少資源の投下が競合的な諸産業のあいだに配分されるさいのその配分の比率を規定する諸力の性質を確定するという問題である。そして、完全に合理的な社会においてはこの資源配分は市場をつうじて作用する「相対価格」によって支配されるということから、市場と価格の原理—これが価値分析の提供するものである—

(注24)のつづき)

という公式から得ることができる。これは、その商品から生じる売り上げ高(生産費に等しくなる)が市場において購買もしくは支配しうる労働量を示す。「貨幣での価格」の「労働での価格」へのこの転換原理は、完全に一般的なものであり、個々の商品に適用しうるのと同じように全体としての産業にも適用することができる。そして、この原理がスミスの体系において意義を持つのは、まさしくこの広範な—全体としての産業の広さにまでの—適用ということである。スミスは個々の商品の価値から始めているけれども、彼は、事実、全体としての諸商品の価値にまで進んでいる。ここにおいてもまた、社会の年々の生産物の一部を地主や資本家が受け取り、一部分のみが労働者のもとへ行くのであるかぎり、全体としての財によって支配される総労働は、それらの財を生産するのに支出される総労働を超過する。いま、Wで全体としてのその経済にとっての総賃金を、Rで総地代を、Pで総利潤を表わすとすれば、労働支配尺度の公式は、 $\frac{(W+R+P)}{w}$ ということになる。ところで、総賃金、総地代、総利潤の合計(W+R+P)は、こんにち、要素費用での国民所得として知られているものである。したがって、この拡大された公式、 $\frac{(W+R+P)}{w}$ は、労働というタームでの、国民所得の尺度、あるいはケインズ流に言えば「賃金単位」というタームでの、国民所得の尺度以外の何物でもないのである。(A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 105-110)

25) A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 110-111.

が、これらの経済学者にとっては、経済学の中心部分として現われてくることとなる。それにたいして、スミスの体系の中心的な地位を占めるものは、まさしく、諸国民の繁栄の進行と後退の諸原因および諸合意についての分析ということである。「配分」がなんの役割も果たさないというわけではない、それはたしかに役割を果たすのである、しかしその地位は従属的なものである。つまり、配分の問題は、主に、相対的な利潤性にもとづく適切な「資本の投下」が諸国民の富を増加させるという限りにおいてのみ、関連しているのである。『国富論』の中心的な諸命題は、現在我々が成長の経済学として知っているものと関連する。それゆえ人はなぜスミスがそれほど多くの重要性を価値に置いたのかということを不思議に思うかもしれない。スミスが『国富論』をつうじて言っていること、つまり、富は分業の進展とともに増加するということ、分業は市場の拡大によって促進されるということ、資本の蓄積は物的繁栄の条件であるということ、資本形成は貯蓄の結果であるということ、このようなことを言うためには、人は、価値についての洗練された理論を必要とはしない。『国富論』は本質的には成長の経済学についてのエッセイである、そして、成長モデルは、ポスト・ケインジアン成長論者たちのあいだの慣行が十分に例証しているように、²⁶⁾ 相対価格理論の助けなしに進展させられえたのである。だがそれでも、異時点間の比較のために、富を構成する異質的な財を一般的な標準のタームに翻訳するといったことのためにだけでも、理論の展開の一つの段階で、²⁶⁾ 価値という概念が導入されなければならない。この問題は集計に^{アグロゲーション}関する問題、つまり、国民所得を測定するための方法を工夫する問題である。現代の理論家たちなら、「指数」としてこんにち知られているものの助けをかりて、この問題を解こうとするであろう。それにたいし、スミスは労働尺度の助けを援用するのである。その目的は、産出高の総「価値」の変動というタームで、時間をつうじて一社会内にどのような道すじで進歩が生

26) なお、ダス・ギプタは、ここでの問題とは関係ないとしながらも、個人的には、このような慣行を好ましいとは考えてはおらず、成長理論が相対価格理論と統合されることが好ましいとしている。(A. K. Das Gupta. p. 113, n. 25.)

じているか、ということを示すことである。このような意味で、支配労働価値尺度は、スミスの体系においては、経済的変化のプロセスを理解するための鍵を提供するのである。²⁷⁾

27) A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 112-114.

なお、価値に関するスミスの議論における「尺度」の側面を強調する見解は、M. ブローグの1959年の論文にも示されている。ブローグは、スミスが労働価値説を定式化しようとしたが商品の労働購買力とその商品の生産に投下された労働量とを混同し、生産物の労働価格と生産物の労働費用という異なる事柄を同一視したといった見解にたいして、『国富論』を偏見なく読めば、スミスが、価値の尺度と価値の原因との間の区別に気づいていたということ、また、価値の原因にはほとんどかわりあわず、なんらかの時点における相対価格がなぜそのようなものであるのかといった価値論の伝統的な問題はただ要約的な取り扱いを受けただけで、スミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見することに興味を抱いていたということがわかる、とする。ブローグによると、たしかに『国富論』における諸論題の配置順序はスミスの目的についての誤解を招くこととなった、第1編第4章「貨幣の起源と使用について」は、「財貨の相対価値または交換価値」の決定を分析することを約束して終わっている、しかしつづく第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、その労働での価格と貨幣での価格について」は、そのことをなさず、貨幣価格における変化を評価するための異時点間の標準を定義することを試みており、資本は過去に支出された労働に還元されようという考え方をしりぞけて単純な生産貨幣費用説で終わっている第6、第7章までは、相対価格の決定は議論されない。そして、第6、第7章からの結論も第5章で提起された「労働という物差し」には影響を及ぼしはしない、だが、もし第5章が第6、第7章の先にはなくあとにつづいていたならば、このことはもっとはっきりしていたであろう、とブローグは言う。ところで、ブローグは、「労働という測定物差し」についてのスミスの議論は、こんにち、指数問題を克服しようという努力を含む主観的厚生経済学の一つの試みと見なされているとする、そして、ブローグは、スミスが、資本蓄積率の指標、主観的所得の大きさの指標という二つの別個な意味で労働一標準^{スタンダード}を使用し、そしてスミスの議論は発展しつつある経済においてはこれら二つの指標は同一のものになるということを示すことに向けられている、ということを描する。(M. Blaug, 'Welfare Indices in the *wealth of Nations*', *Southern Economic Journal*, vol. xxvi, no. 1-4, July 1959- April 1960, p. 150)

『国富論』の成長論的側面を強調し、そして、ダス・ギョプタほどではないが、
(注27は次ページへつづく)

(c)

以上でみてきたスミスの経済学についての解釈における二つの対照的な見解、つまり、スミスの経済学の中心は成長理論にあるという見解、スミスの基本的な関心は代替的な諸用途間への稀少資源の効率的な配分の問題よりもむしろ物的な富の増大にあったという見解と、もう一方の、スミスの経済学の中心点は、理論経済学の観点からすれば、稀少資源の最適配分を確保するうえでの生産物ならびに生産要素の相対価格が果たす役割を叙述することにあるという、二つの対立的な見解にたいして、スミスの政策理論との関連でみれば、均衡的配分および成長という目標は衝突するものではなく、むしろ、価格機構は成長プログラムの達成において積極的な役割を演じたのだという仮説を立て、その観点から、スミスの経済学の理論

(注27のつづき)

スミスの価値についての議論における「尺度」の側面を強調する見解は、W. J. バーバによっても示されている。バーバによれば、スミスが価値、価格に関して提起した問題は、こんにちの経済学者が適切なものと考えた問題とは幾分距離のあるものとされる。つまり、20世紀中葉の経済学者たちは、ある特定の商品の「価値」を論ずるときには、ふつう、市場がその商品にたいして支払おうとする価格を確定することを試みることによって進もうとするであろう。それにたいして、古典派の人々は、価値と価格はそれほど容易には互いに同一のものには帰されえないということを主張しようとした。「価値」は市場の気まぐれからは独立したものと見られていた、名目価格、市場価格は変動するかもしれない、しかし、価値は一定不変に留まる、というのである。バーバは、スミスはこのような基本的な考え方にもとづいて価値についての彼の説明をつうじて二つのことをなそうとした、とする。その一つは、少なくとも、市場価格の動きについての部分的な説明を提供するということである。もう一つは、(スミスの論究の一般的な流れにとってより重要なものであるが)長期間にわたる全体としての経済的变化を測定するためのベースを提供するということである、というのは、市場価格はあまりにも気まぐれに変化するために産出高の異時点間の変化を測定するためには満足のいくものではなかったため、安定的で不変な標準が追求されることになった、というのである。ところで、バーバによれば、国民産出高の変化を測定するための技術を工夫するということにたいするスミスの関心は、より大きな重要性を持つものであった。というのは、(スミスがそうであったように)長

(注27は次ページへつづく)

の内容を検討しようとするのが、S. ホランダールである。²⁸⁾

そして、スミスの経済学についてこのような仮説を設定したうえで、ホランダールは、スミスの価値論については、「スミスの価値論の正式な議論は、長期的な一般均衡の考え方を達成しようとする一つの試みと考えられれば、もっとも正しく評価されるであろう。このことは、初期の『講義』に記されているような価格決定についての所論にさえ現われている『代替的機會』の強調からも明らかである²⁹⁾」という立場をとる。つまり、ホランダールは、「価格決定」という価値・価格論の中心的な問題についてのスミスの議論を、資源配分原理、一般均衡といった方向からとらえようとするのである。³⁰⁾

(注27のつづき)

期間にわたる経済的拡張という問題に関心を抱く分析者にとっては、実際に成長が生じたのか否かということを確認することができるということが、明らかに重要なことであったからである。(W.J. Barber, *A History of Economic Thought*, Penguin Books, 1967, reprinted, 1970, pp. 27, 30-31, 33.)

なお、スミスの「尺度」の内容については、別の稿で取り扱う予定である。

28) S. Hollander, *ibid.*, pp.17-22. 邦訳, 15-19ページ。岡田純一, 「スミス経済学の包括的把握 — S. ホランダールの『アダム・スミスの経済学』に因んで —」『早稲田商学』第245号, 1974年8月, 65ページ。

なお、岡田氏は、このような観点からの、ホランダールによるスミスの経済学の理論的内容の検討にたいして、つぎのように述べている。「この検討において、ホランダールは、スミス理論における『資源配分理論』と『成長理論』との結びつきにたいして、スミス独自の政策理論を媒介にして、スミスの視点の解明に新たな光をあてたといえるように思う。この点の解明にあたって、ホランダールが、均衡化メカニズムの意義については、『国富論』の公式的な理論編である第1編からは何らの解答も引きだせないが、むしろその『応用諸章』である、第4編や第5編の、輸入についての当時の制限や、植民地貿易を取り扱った個所などで、スミスが、均衡化メカニズムを十全かつ有効に利用して立論を進めているとし、そのことを指摘例証している点が重要であると思われる。」(岡田純一, 前掲論文, 65-66ページ。)

29) S. Hollander, *ibid.*, p. 114. 邦訳, 166ページ。

30) 岡田純一, 前掲論文, 83ページ。なお、ホランダールが指摘しているように、M. ブローグは、

(注30は次ページへつづく)

ところで、以上本稿Ⅱの(a), (b)でみてきた諸見解およびS. ホランダ－の見解においては、『国富論』における価値・価格に関するスミスの議論は、どちらかといえば、全体としての経済システムについての分析という観点

(注30のつづき)

1962年にその初版が出た彼の著書において、価値に関するスミスの議論の「一般均衡」的傾向にでなく、「部分均衡」的傾向に注意を喚起している(S. Hollander, *ibid.*, p. 114, n. 1. 邦訳, 197ページ, 注1)。ブローグは、スミスは使用価値と区別された交換価値を考察の対象としたとし、また、スミスが扱った問題を、何が価値の最良の尺度であるかという問題と価値を決定するものは何かという問題に分類し、『国富論』第1編第5章は前者の問題に、そして、第6章、第7章は後者の問題に、あてられている、とする。そして、後者の問題についてのスミスの議論に関連して、スミスが「市場価格」と「自然価格」と呼ぶものは、マーシャルが短期価格と長期価格と呼ぶものと同一のものであり、また、マーシャルと同じようにスミスも、本質的には、いかにして価格が長期において決定されるかということを説明することに興味を抱いていた、とする。そしてブローグは、『国富論』第1編第7章を、『国富論』における一つの主眼点とし、そこに含まれる「部分均衡分析」的手法に注目しつつ、マーシャル的な推理法、近代経済学のツールを援用しながら、スミスの議論についての説明を行ない、スミスにおける「競争」、「独占」の問題にも言及している。(M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, (1st ed., 1962,) revised edition, Illinois, 1968, pp. 41-46. 久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』(全3巻)(初版の訳), 東洋経済新報社, 1966-1968年, (上)54-61ページ。) 他方、ブローグは、第5章で扱われる問題は、価値論に関するものでなく、厚生経済学に関するもの、またとくに、厚生指数の問題つまり異時点間および異場所間の個人もしくは社会の暮し向きの動向を評価するための指数に関するものとして、第5章に含まれるスミスの議論を分析し、また、物価のトレンドという形で第1編第11章における銀の価値についての「余論」に注意を喚起している。(M. Blaug, *ibid.*, pp. 51-55. 邦訳(上)66-71ページ。)

なお、A. スキナーは、価値・価格についてのスミスの議論を、価値論(スキナーによれば、この価値論は、交換比率の決定因に関する議論と価値の測定手段等に関する議論とに分類され、前者の議論は、さらに、価値と有用性に関する議論—これはさらに二つの段階に分けられる—と価値と生産に要する費用に関する議論とに分類される)と、価格とその決定因という問題についての議論に分けて検討するのであるが、価格とその決定因という問題についてのスミスの議論に

(注30は次ページへつづく)

からとらえられており、価値・価格についての分析は、それ自体としてよりもむしろ、全体としての経済システムの分析との関連において位置づけられている、といえる。『国富論』における価値・価格に関する議論と全体としての経済システムについての分析との関係に関して、J. P. ヘンダーソンは、1954年の論文で、つぎのような見解を示している。

ヘンダーソンによれば、『国富論』は、全体としての経済システムのプロセスについての諸理論と個々の商品の価格づけについての諸理論を統合しようとする妥当で一貫した試みを構成する、とされる、しかしまた、スミスを含めて古典派の経済学者たちはこの統合という問題にたいして、個々の消費者や生産者という個々の経済主体に関する基本的公理から分析を展開しようとする「限界革命」以後の効用分析とは異なって、個々の価格は経済システムの決定因であるよりはむしろ経済システムの関数であるという立場から、アプローチした、とされる。ヘンダーソンによれば、古典派の理論は、ニュートンの労作にその最も完全な表現を示す機械論的法則の時代に定式化されたものであり、それは全体としての経済システムについての諸問題を取り扱い、部分分析を一般分析にとっての補助的なものとみなした、個々の経済主体そのもの、特定商品の価値・価格といったことについての分析、微視的分析は、特殊なものについての研究であったのであり、また本質的に、全体としてのシステムの巨視的な運動 (mac-

(注30のつづき)

関する説明のなかで、スキナーは、価格の諸決定因の検討においてスミスは特定の諸商品の価格を決定する諸力の説明に着手し、その説明の過程で部分均衡の性質を明らかにし、さらに、その分析を、一般均衡の現象を説明する一手段として、したがってまた、ある(所与の)生産要素ストックがさまざまな用途あるいは仕事のあいだに配分される様式を決定する諸力を説明する一手段として、用いたように思われる、ということを指摘している。(A. Skinner, *ibid.*, pp. 47-53. 邦訳, 100-115ページ)

roscoptic movement) の枠内でその地位を占めるといった研究であった、とされるのである。³¹⁾

たとえば、ヘンダーソンによれば、スミスは厳密にミクロ的な現象についての議論を持っていたけれども、そこでのスミスの価格理論は、現代の用語でいえば、価格は、市場の状況が特定の諸商品の移動にたいして及ぼす影響を反映する、といったようなものであるとされる。さらに、またスミスはこれらの影響を、偶然の出来事、自然的原因、個々の行政上の法規、商業や製造業等における秘密、独占という五つの範疇に分類して考察する、そして独占価格はどんな場合にも獲得できる最高の価格であって、この価格は自然価格あるいは真実価格からの乖離が最も大きいとして独占の影響を指摘する、しかしながら、この独占、独占価格が問題にされるのは、独占による高価格そのものというよりも、むしろ、独占、独占による高価格がファンドの誤用や将来の投資額の減少に導くような分配の歪曲を引きおこすことになればそれによって年々の生産物フローの大きさ、生産される交換価値総額の大きさが減少させられることになるという意味で、独占が問題にされているのであり、独占の問題は、いわば、「成長」問題にかか³²⁾わるものとされている、とヘンダーソンはいうのである。

スミスの価値・価格論はもともと全体としての経済システムの分析にとって補助的なもの、また、従属的なものであったというこのようなヘンダーソンの見解にたいして、またさらに、スミスの価値・価格分析は、商品の価値・価格の因果的説明という観点からよりも、「尺度」との関連から見られるべきだとするさきにみたダス・ギュプタの見解にたいして、スミスの価値・価格論のなかには商品の価値・価格の因果的説明を意図された議論および「尺度」に関する議論が含まれており、しかもこれらからなる価値・価格分析は、『国富論』において、全体としての経済システムの分析と統合された形で、しかも、それにたいして従属的、補助的なもの

31) J. P. Henderson, 'The Macro and Micro Aspects of the *Wealth of Nations*', *Southern Economic Journal*, 1954, p. 25.

32) J. P. Henderson, *ibid.*, p. 34.

としてでなくその位置を占めているとするのが、S.カウシルである。³³⁾

1973年の論文においてまず、経済学についてのスミスの考え方については、カウシルは、「経済学についてのスミスの考え方は、『国富論』の内容の全般的な構造や『国富論』の『序論および本書の構想』に示されているものを別としても、³⁴⁾ 643ページに、また実際、その本の（フル・引用者）タイトル『諸国民の富の本質と諸原因に関する一研究』のなかに、明示的に述べられている³⁵⁾」とする。

そしてカウシルは、つぎのようにして、全体としての経済プロセスについての分析との関連において、価値・価格の因果的説明というスミスの価値・価格論の「理論」の側面の独自の位置を確定しようとする。カウシルによると、スミスは富の「本来的な」源泉を労働に見出し、そして富の増大の原因を分業に見い出しているのであるが、この分業は経済システムの本質を明らかにする、つまり、「交換性向」から発するとされるこの分業は、広大な商品交換複合体を生み出し、そしてこの広大な商品交換複合体をつうじて経済システムが理解されてきたしまた理解されうるのである。ところで一国の富は、単に、その年度の間のこれらの商品交換の総計にすぎない。その総計の動きについてのスミスの関心は、このマクロコスミックな総計へとしだいに達していくところのミクロコスミックな商品フローの論理へのスミスの関心を前提としているように思える、とされる。カウシルは、『国富論』第1編に示されているのはまさにこの論理である、とする。つまり、分業についての諸章が商品フロー複合体すなわち経済システムを明確に説明し、そのあとの価値および分配についての諸章が、商品フロー複合体の論理、ミクロコスミックな商品フローの論理をもつぱら

33) ヘンダーソンおよびダス・ギュプタの議論にたいするカウシルの論評については、S. Kaushil, 'The Case of Adam Smith's Value Analysis', *Oxford Economic Papers*, vol. 25, no. 1, March 1973, pp. 68 ff. を見よ。

34) A. Smith, *ibid.*, p. 643. 大河内一男監訳、前掲書、(II) 498ページ、には、つぎのような記述がある。「…本来政治経済学とよばれるべきものを扱っているだけでなく、すなわち、諸国民の富の本質と諸原因を扱っているだけでなく、…」。

35) S. Kaushil, *ibid.*, pp. 60 - 61.

説明することに向けられる。その経済システムを特徴づけるその交換複合体は、一定の交換比率もしくは交換価値 — 一つの社会的範疇 — を包含し、そして、これらの比率あるいは価値が決定されるさいの諸法則および諸原理の叙述が、スミスの価値分析の主題を構成している、とするのである。³⁶⁾

また、スミスの価値・価格分析の「尺度」の側面に関連して、カウシルは、スミスにおける「商品の交換価値の尺度」としての「支配労働尺度」は、スミスによる経済進歩の指標の追求と結びつけて解釈することもできるとし、さらに、この「支配労働尺度」という形でスミスは GNP の測定、GNP の異時点間および異場所間の比較をなすための装置を彼なりに開拓したように思える、としている。³⁷⁾ さらにカウシルは、スミスが労働、土地、資本を考慮に入れた交換価値の三要素理論を持っており、支配労働量で測定される単一商品の交換価値についての三要素ミクロ・モデルを展開し、それを、諸商品の総計の交換価値についての三要素マクロ・モデルに拡大し、さらに、「賃金と利潤と地代は、すべての交換価値の三つの基本的な源泉であり、同時にすべての収入の三つの基本的な源泉である」とすることによって三要素の分け前というタームでの分配問題についての彼の考え方を示すように拡大している、とする。³⁸⁾

さらにまた、カウシルは、市場メカニズムの本質、作用についてのスミスの認識に関してつぎのように述べている。スミスはもっぱら市場メカニズムの本質および作用についての考察をなすことを意図しはしなかったにもかかわらず、調節のプロセスについてのスミスの分析は、競争市場メカニズムの機能についての彼の深い理解を示している。すなわち、費用によって決定される自然価格は、需要—供給によって決定される市場価格が「持続的に」引きつけられる「静止と持続の中心」と考えられている。これは、マーシャル流に言えば、長期安定均衡である。また、初歩的な水準のものであるとしても、商品市場と要素市場との相互依存についての明確な理解

36) S. Kaushil, *ibid.*, p. 61.

37) S. Kaushil, *ibid.*, pp. 62-63.

38) S. Kaushil, *ibid.*, p. 65. A. Smith, *ibid.*, pp. 50-54. 大河内一男監訳、前掲書、(1) 85-92 ページ。

も存在する。つまり、その調節プロセスは、要素報酬にもとづく自然価格からの市場価格の乖離とその結果として生じる要素供給と生産物供給の需要への調節ということをつうじて引きおこされるものとして示されている、³⁹⁾ というのである。カウシルは、以上のような諸指摘をつうじて、スミスの全体としての経済プロセスについての分析にたいする価値・価格分析の関連とその位置を示すのである。

結びに代えて

以上において、我々は、「アダム・スミスの価値論についての諸研究」についてのサーヴェイの一環として、主に今世紀に入ってから海外において発表された諸研究から、『国富論』におけるスミスの価値論の位置という問題に関する諸見解をみてきた。

I においては、『国富論』におけるスミスの価値論を、富についての重商主義的見解にたいする抗議の言葉のなかでたまたま展開されたものとする A. C. ホワイトカーの見解、生産理論からの逸脱として位置づける E. キャナンの見解、それらの見解と対照をなす E. ロール等の見解、『国富論』におけるスミスの価値論を「市民社会」の研究という視点から位置づける R. L. ミークの見解、古典派政治経済学の中心的関心事を自己制御的な経済秩序の「自然法則」とみる M. ドップによる、スミスにおける「自然価値」についての見解、市場メカニズムをつうじての資源の効率的配分という観点から『国富論』における価値論の重要性を強調する O. H. テラーの見解、がみられた。

II においては、『国富論』の経済理論体系における価値論の位置に関する諸見解が見られた。まず、(a)において、主に『国富論』における資源配分、一般均衡といった側面を強調する論者による見解および V. W. ブライドンの見解がみられた、(b)において、『国富論』の成長論的側面を強調する論者による見解がみられた。そして、(c)において、(a)および(b)にみられるスミスの経済学の本質についての議論をふまえたうえで、『国富論』に

39) S. Kaushil, *ibid.*, pp. 67-68.

における価値・価格論を資源配分原理、一般均衡といった方向から位置づけるS. ホランダールの見解、そしておなじく(a), (b) でみられた議論と関連をもつ問題であるが、全体としての経済システムについての分析と価値・価格論との関係という問題に関して、J. P. ヘンダーソンと S. カウシルの見解がみられた。

〈補記〉

いうまでもなく、『国富論』第1編のタイトルは「労働の生産力における改善の原因と、その生産物が国民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について」であるが、C. ナポレオウニは、スミスがこのタイトルに示されている問題のうち生産物の分配という問題を取り扱うさいに価値論を必要とし、そして、価値論についての系統的記述が分配理論の必須で欠くことのできない部分となっている、ということを指摘している。その理由は、ナポレオウニによれば、重農主義におけるのとちがってスミスにおけるように生産性が土壌の自然的な肥沃性という特質というよりも労働に帰され、農業から、その経済を構成する他のすべての産業上の諸活動にまで一般化されるときには、純生産物の量的な確定に到達するためには、投入と総産出高とを同様なタームで、すなわち価値タームで表現することが必要であるからだ、とされる。(C. Napoleoni, *Smith Ricardo Marx*, translated by J. M. A. Gee, Oxford, 1975, pp. 38–39.)